



episode 38 親になってわかる、母流の子育て「離れ業」

投稿者 佐藤 将人 さま(神奈川県)

『空とぶ船と世界一のばか』。母によると、僕はこの本を数百回読んでもらったらしい。馬鹿正直な若者が、「空とぶ船を作った者には王女と結婚させる」という王様のお達しに応えようと、旅に出る。道中で、空とぶ船が作れる斧をもらい、湖の水を飲み干す「くじら男」や、世界なんて一またぎという「はや足」など、超人的な離れ業を持った仲間を船に乗せて王宮へ向かう。王様は、「いかにも田舎者」の若者に無理難題を出して拒もうとするが、仲間たちが技を駆使して解決してくれてハッピーエンドという、大人になって読めばなんとも都合の良い物語だ。しかも長いのだ。20分はかかる。僕はたいてい、途中で寝てしまう。でも、隣の母を離すまいと、いつもその腕をがっしりつかんでいたらしい。

僕が結婚をし、長女が生まれて間もなく、母は急なガンで他界してしまった。「親同士」として、母と話がしてみたかった。どんなことを考え、僕らを育てたのかと。「母がしてくれたこと」を思い出しながらの、子育て。一番忠実に守っているのが、読み聞かせだと思う。

長女は小学3年ごろから、よく『世界一のばか』を持ってくるようになった。そして必ず、僕が母の腕を離さないようにしていたという話をせがむ。読み終わると僕の腕を強くつかみ、「トトの真似」と笑いながら目を閉じる。もう小学5年生になる。友だち関係に勉強、習い事、子供なりに、いろいろあるはずだ。疲れてしまう時もきっとあるのだろう。甘えたいときには、そうさせてやりたいと思う。

親になってわかる。母がいつも息子を尊重し、見守ってくれたこと。それは誰でもできそうで、実はすごく難しい離れ業だ。“空飛ぶ船”はないけれど、人生という航海は厳しくも楽しい。超人的な仲間はいなくても、一緒にオールを漕いでくれる友人はいる。僕が妻という素敵な“王女”と出会え、幸せな家庭を築けているのは、きっと母の「離れ業」のおかげなのだと思う。



『空とぶ船と世界一のばか』
アーサー・ランサム 文
ユリー・シュルヴィッツ 絵
神宮輝夫 訳
岩波書店 1970年

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2025」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



ロシアの昔話に惚れこんだジャーナリスト

1930年に、児童文学の進路を著しく変えた作家がいます。休暇冒険物語の称号を与えられたイギリスの作家アーサー・ランサムです。

作家を志した当初から、子どものための物語を書きたいと思っていたランサムは、ロシアの昔話に惚れこみ、ロシア語を学ぶためロシアに渡ります。その一年後に勃発した第一次世界大戦と、続くロシア革命で、ジャーナリストとして活躍しました。その傍ら、ロシアの昔話を熱心に収集してランサム風にアレンジしたもののひとつが、『空とぶ船と世界一のばか』です。

大事件を自分の目で見ようとする姿勢こそ

『空とぶ船と世界一のばか』がはじめて発表されたのは、1916年に初版が出版された昔話集『ピーターおじいさんの昔話』です。本書に収録された「空とぶ船～」を含む22編の昔話は、すでに有名なアフナーシェフのロシア民話集にすべて収まっていました。ランサムが編纂した昔話集には、原話の出典を「アフナーシェフの民話集」と明記されています。

ランサム流の再話方法は、「類話をみつけられる限りたくさん読み、それを全部わきに置いて自分で物語を書く」ことでした。ランサム作品の翻訳を数多く手がけた絵本作家の神宮輝夫氏は、「翻訳ではなく記憶をもとに書いているので、民話そのもののおもしろさがランサムらしい、きめのこまかさ、色彩のゆたかさによって十分に生かされている」と分析しています。また、従軍記者となり取材を続けたランサムを、「激しく動く歴史のなかへ入りこんで、大事件を自分の目で見ようとする態度こそ、後の子どもの作品にそのままあらわれている」と続けています。

世代を超えて語られる理由とは

『ピーターおじいさんの昔話』の編集にあたってラ

ンサムは、はじめロシア語から直接訳そうとしたのですが、表現が難しく満足できませんでした。そこで考えたのは、幼い孫と一緒に暮らすロシア農民のピーターおじいさんにお話を語ってもらうという枠物語の形式をとることでした。すなわち、長い冬の夜をのんびり過ごすために、2人の孫がおじいさんにお話をせがむという構図です。語りかけられている孫の立場で聞くことで、イギリスの子どもたちが異国の昔話に入り込みやすくなったのです。

こうしてランサムの昔話集は、イギリスの子どもたちにとってロシア昔話の定番作品となったのです。

児童文学の進路を著しく変えた作家

アーサー・ランサムといえば、『ツバメ号とアマゾン号』を抜きに語ることはできません。本作が児童文学の進路を著しく変えた作品だからです。

1884年、イングランド北部のリーズで生まれたランサムは幼少期、リーズ大学の歴史学教授であった父親の夏休みになると、イングランドの湖水地方にある農場で過ごしました。自ら休暇が生きがいったと認めるほどで、幼少体験がそのまま活かされ、休暇冒険物語の大家となったのでした。

13歳のとき父親をなくしますが、文筆業を始めてからも、幼少期に父と過ごした湖水地方を度々、訪れています。そこで、老芸術家夫妻の孫の遊びを見ているうちに、湖を舞台にした子どもが主人公の物語が書きたくなり、そして1930年に出版したのが『ツバメ号とアマゾン号』なのです。

ランサムの海物語、休暇冒険物語が世紀を超えて現代でもイキイキとしているのは、実体験の描写による力強さにあるでしょう。

文献

- 1) 神宮輝夫：若者の活動への意欲を描く アーサー・ランサム、学校図書館 通巻149, pp.55-58, 1963.
- 2) 松下宏子：アーサー・ランサム（現代英米児童文学評伝叢書5）、KTC中央出版、名古屋、pp.10-31, 2002.
- 3) ヒュー・シェリー著 青木祥子 訳：アーサー・ランサム、季刊子どもと本（162）、pp.2-13, 2020.